

溪声山色(けいせいさんしき)

令和元年7月第1週放送

---

「峰のいろ 谷のひびきも 皆ながら わが釈迦牟尼の <sup>しゃかむに</sup> 声と姿と」

これは道元<sup>どうげんぜんじ</sup>禅師が残された和歌です。山の峰々に現れる色とりどりの姿、谷川を流れる溪流が奏でる音色、これらは全て私のお慕いするお釈迦様の声と、お姿そのもの……。ということを歌われているのでしょうか？

自然の中に身を置いた時、しばしばそこに神々しさを感じ、安らかな癒しの世界にひたるという経験をなされたことのある方も多いのではないのでしょうか。そのような経験を道元禅師がお釈迦様の声や姿の現れとして捉えたのがこの和歌です。

更にそのあり方を究明したものとして『道元<sup>どうげんぜんじ</sup>禅師』の「溪声山色」の巻があります。冒頭は題名の由来ともなった中国北宋の時代の詩人、蘇東坡<sup>そとうば</sup>の漢詩から始まります……。

「溪流のせせらぎはお釈迦様の説法の声、山の色とりどりの姿はお釈迦様の清らかなお姿、そこに数限りなく現れているお釈迦様のみ教えを、どのようにして人に説明したら良いものだろうか。」道元禅師がこの蘇東坡の漢詩に触発されるようにして「溪声山色」の巻を書かれたであろう事は想像に難くありません。この漢詩は、蘇東坡と常<sup>じょうそうぜんじ</sup>総禅師との交流によって出来たものだと思います。

私達は自分の外側の世界に美しさや安らぎを感じることがありますが、その感動に終始してしまっていないのでしょうか。その時、私達自身の内側に目を転ずることは概してなおざりにされがちです。しかし道元禅師はそこを見過ごしてはならないと言います。蘇東坡が表したものは仏の世界を実現する源となる菩提心であって、それは正しい仏様のみ教えに触れ、自らの内側を高めるという実践が伴って初めて獲得されるものなのです。

## 『 禅のこころ -曹洞宗- 』

---

現在は大気汚染、地球温暖化、水質の悪化、洪水や干ばつなど、わが国も含め多くの国々が環境破壊や自然災害に直面しています。緊急時の対応は勿論の事ですが、普段からの自然との向き合い方が問われているのではないのでしょうか。自然を自分の外側にある消費対象として思いのままに利用してきた我々人間の側に今、内面の反省が求められているのだと言えましょう。

山々の姿や、溪流のせせらぎにお釈迦様の姿を垣間見ることが出来るようになるためには、まず自らの内側にそのための共鳴するものが無ければなりません。最初の志を忘れず、常に自分の心を清める努力を怠らず、それらを努め守っていくことを道元禅師は強調します。すると自分の内側と外側という仕切りは解消され、畏敬の対象たるお釈迦様の姿の現れとしての自然が立ち上がって来ます。そこには紛れもない仏の世界が開かれているのです。

— 終 —